

京城日報

刊夕日七十

米獨境絶交後の形勢

支獨断交切迫

支獨断交切迫に際し、支獨断交公使は各地領事に對して引揚進退を命ぜり（北京電）

芳澤代理公使の活動

日本公使より第二回の電に接する芳澤代理公使は十六日午後及午後、英露公使と打合せを爲したる後、英露公使を訪問せり（北京電）

國務院外交委員會

支獨断交は各部より委員一名宛に集議局に就き研究し、外交委員會の名稱を附し十六日を以て第一回會議を開き（北京電）

協商國側加入回避か

支獨断交に際し、協商國側は支獨断交を回避したるも、協商國側は加入に就ては之を回避する決心あり（北京電）

駐支獨公使引揚苦心

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

在支米公使の活躍

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

使の活躍

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

米獨境絶交後の形勢

支獨断交切迫に際し、支獨断交公使は各地領事に對して引揚進退を命ぜり（北京電）

芳澤代理公使の活動

日本公使より第二回の電に接する芳澤代理公使は十六日午後及午後、英露公使と打合せを爲したる後、英露公使を訪問せり（北京電）

國務院外交委員會

支獨断交は各部より委員一名宛に集議局に就き研究し、外交委員會の名稱を附し十六日を以て第一回會議を開き（北京電）

獨逸軍艦處置協議

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

潜航艇戰策を緩めず

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

宣戰布告を爲すとして

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

米國の對獨誓約要求

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

獨帝訪獨の結果

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

米人の救済事業を拒む

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

青島役記念館

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

八四艦隊提案

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

日郵主總會期

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

機業夏準備

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

岡事務語りて

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

三銀行の陸氏招待

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

持地局長歸任

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

官立校長會議

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

酸配給應請

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

金久保旅團長歸任

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

本島博士歸任

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

仁川經濟界閑散

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

清州

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

水原

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

遷信局長更迭

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

人事

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

三銀行の陸氏招待

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

持地局長歸任

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

官立校長會議

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

酸配給應請

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

金久保旅團長歸任

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

本島博士歸任

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

仁川經濟界閑散

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

清州

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

水原

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

遷信局長更迭

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

人事

支獨断交は獨逸公使と共に北京駐在獨逸公使を如何にして引揚げ

第六十一席

田邊南龍口演

A black and white illustration of a man in traditional Chinese attire, possibly a scholar or official, standing and looking towards the right. He is holding a long, thin object, possibly a sword or a staff, in his right hand. The background is simple, with some stylized clouds or smoke.

世に
 大正六年三月十日
 朝鮮總督府府尹 金谷彦

早川直營 黃金館

[illegible]

大塚釀造所吟製
前田酒店
電話一三七番
發賣元
京橋本町二丁目

江頭眼科醫院

冬期にも
必要なる
アルボス
消毒石鹼

入説明書無代で
目には判らる様
東京神田
電話
七二二番

東所省には
京眞空療
法研究
所

寫眞銅版 亞鉛 凸版
寫眞攝影、コロタイプ版印
東京 太平町 京城日報社
電話 二二二番
寫眞製版部

白粉かしら中の白粉かしら塗
普通のたゞおしろい
國産の生地から美しい白さに染

肺結核 新藥
フアコール

東京醫科大學教授
醫學博士 高橋順太郎氏 創設
フアゴールは最大の効果ある結核治療として世界の公
認を得たもの也
諸君に實驗報告書材料送呈△定価金拾五圓入金金庫四拾
五圓△銀兩割入金庫圓六拾圓△其他大坂歌壇リ
△△圖書寄託金送呈△無き時は直接御注文乞ふ可
一手買取金
東京日本橋區本町四丁目
友田合資會社
總店東京一九三八年
大阪店 西町特店
長田兵衛

●直段一大引下けと取引法改善謹告

各位益々御情福奉賀候弊店儀永年各位の御眷顧御引立を蒙り御蔭を以て益々隆盛に趣き候段奉深謝候 随つて平素各御得意様の御厚意に酬ひん爲め今般店則の一大改革を施し且つ諸品一般產地直段益々暴騰一方に不係弊店は正反對に一大引下げを斷行し誠心誠意薄利多賣主義の本分を以て大勉強可仕候間多少に不係續々御買上の程奉懇願候

石金銘模漆
油物茶穀諸器
石陶綿清乾什
鹹器 酒物器
澤磁荒寶 文具紙
魔器物油物

仁川宮町 電話七六二番 飯堂京城三八九番

津田兄弟屋本店
津田兄弟屋陶器部
津田兄弟屋支店

お顔かほの荒止め
お顔かほの艶出し
お顔かほの脂取り

奏効最も
確實なる

ク
ラ
ム
乳
液

の お

「**ウツブ乳液**を脱脂綿につけて毎日数回お顔をお拭きになれば脂く脂肪や汚れが除れて其跡には皮膚の滋養分のみが残りますから何時もお顔が生々しく美しくなります上(何とも云へぬ床し)香ひがして御寒まで清々いたしきす……………」御婦人にも紳士にも好適……………」

クラブ洗粉
ほんこんしんはつめい
本店新發明



力
の
妙
用

力用といふ文字は世間で略し使用さ
るゝ其體態だけを捉へて、概の考を
せしめて見たらと思ふ。然し概は茲に御
座燈籠にあることを紹介せんとする
のではない事を曉つて置く。

夢遊んで興へて云はる如く、佛々祖
々の概、幾千萬卷も悉く之の概の所依
たるさるは、諸般百科の類粗
語、船持これ所依の概であり所據の
法である。第一義諦から申すならば
海の小枝に小鳥の啼く音も、枯風に
揺れし草木の唼も、概の説法とな
るは、漢帝は廣長舌、山色色
非清淨身、夜來入萬四千偈、他日知
何處示人」と誦せし如く、湛々とし
我が大和玉板の精華として、剗

力を用ひて文學上の發展は申すまでもないことであるが、此の力といふ點に就ては種々の意義があつて、物理學上では力の法則とか力學とか云つて、六ヶ數い學說となつて居る。之を精神論から解釋すれば、心理學的宗教的に又種々な解釋の立つてゐるのであるが、今は格別注意し進んで居る時間もないので、一般論に歸着して申せば精神の力、之を換言すれば物なり心なりの生命である。力は即ち生命なりといふても、取つて考へればあるまいと思ふ。天地間に於ける一切生物の生成發育といひ、自然現象の變化轉動といひ、悉く是れ力の表現ならざるはない。生命を第一事物現象の適用自在なるものと見てゐるのである。

英雷の怪魔なる相も思慮過激法身の異地である。或は汗流黒字んだや、夜の密室に響く鐘鳴うさんの哭き聲も、蒼天陣の姉姉囁も悉く之れ靈の所成とせざるものはないのである。

斯く觀いて來ると、何にか禪とは般若止まのない、何ぞも御座れて不得要領の宗旨であるかの様にあるけれども、決してさうではない。要するに神は力を養成するにある。力を神に養育ではなく、諸氏は總て力であるが、その力を修養發展させ、抑連して行くのである。之を世間の教に當めて云へば智仁勇といふに外ならない。佛敎では戒定慧の三學とする。儒教では忠孝悌の三徳とする。佛敎では慈悲喜捨の四無量心を大なる勇猛心であつて、武士道の傾は實に勇猛憂心の發露にあるのである。然し一途に勇猛心といふものでは、匪夫野人の蠻勇ではない。智と仁とを包容した勇猛心でなければならぬ。此武士の精神に最も能く契合したのが禪の宗旨である。禪宗が漢代から發達し唐時代にあつて、鎌倉修養士夫に依つて心力を練りけた武人の多かつた事は誰も知れないであらう。實に武士階級のみで、商工・農林・貴族である、此の神が刻み込まれて居るのである。

人間生活の全般に亘つて運用自在な生命力を修養し發展させるのである。然し如何に百萬言を列べて

外に一切事象の表現なく、力の外に一切事物の運用といふものは無い。即ち力一生命一日用と云ふのはならぬ。

三 今日我が佛教の狀態を見るに、三宗五教盡く分れて、各々立脚の所を懸絶を異にし居る。經に依り論に依り、智に巧に基いて、各異の立脚といふものがあるが、禪宗には所依の經論なく、吾が宗に言句なく、法の施すきなしといふものが禪の立脚である。若し有るといへばお互自身に固小なる同等同一の佛性であつて、之れも他から授けられたものでは更にない。然し今與來の語を以てせば、禪へは一法は施すべきものはなし。佛一教は説の體相を以て、所依の根據であるといふにして、佛性を爲して居るのである。然し各々其專門とする處があつて、一を主とし他を客とするといふことか

禪宗は佛性を出來た語で、或人は此專門は佛性を出して、禪宗は意を主とし、他の諸道門は智を先とし、乃至、法は義、禪は智、他の諸道門は智を主とするといふ様な分方をして居るものもあるが、今強ひて禪の專門とする處をいへば力である。而かもそれは仁と勇とを包容した力を養成するにある。然し只力といふことも、手に手の力あり、足には足の力あり、全身各々其長じた力を持つて居るが、禪の力、腕の力を養成するのである。昔の人は松風を腕で聞くといふが、腕といふ、腕といふは、慈悲心といふに外ならぬ。彼の人は佛性

集約に説明したり、先人の權報をつたばかりでは、何にもならぬ。已に自らに這箇如く、他と實證實究してめて了得する處があるのである。息入息位を生命だとのみ思つたり、物を速ひ事を辦する才が力だに位、へるやうでは、眞に自己の面目を現す此の力は出來ぬ。先づ自己の面目を現す此の力を自覺し用ひ得べき生命を現はさねばならぬ。

六 近來青年學生の人が能く拙の處に於いて困りますから、何うか參照して頂きたい」といふやうな事を聞かされた。そんな事も生佛の斷續の第一歩に於て已に了見達をして居る

[illegible]

店もある。能々飯喰ひ食ふて参する
 には及ばまい。我が禪はそんなも
 のではない。自己を徹見し、力を養
 成するにある。前述の通り勇猛精進
 の力を養へるのには勇猛精進の
 禪の王座である。然し此勇猛精進
 の力は又その根柢となるものである
 佛の俵せに、小兒は流を以て力とす
 る。泣く兒と地泥には勝てぬ昔が
 らいふてあるが、兒の泣く力は能く
 者なる聲に耳がある。婦人は怒る
 を以て力とする。成程生は苦痛の
 やうに兒を見ては眉腐せぬ怒る
 怒りては泣く、恨む。兒の千軍萬馬
 を叱咤したる勇猛精進も虎兇人に泣か
 ず泣かぬ。泣かぬは泣かぬが、
 の諦観なれば四面に餘り伏兵たる島
 嶺域には皇統あり。他は皆退歩其なり
 刀槍甲冑に用ゐる用たることは後
 世談に主中より擲出したる記事ある
 に依り、勇猛精進の京城の好禪は一切
 之を擲出しすけるの準備を爲したる
 が如し。
 王方は礫石窓口に餘り閑近に、
 校舎は水色閑近に、龍窟せしもの、
 如し。戰闘は戦後先佛の衝突に陥り
 たるも、兩軍相離るること里、我軍
 は高きに據りて之を望見し、當日午前
 十時より衝突し十二時に至りて勝敗
 の決り見る。敵は敗者を収めて成州
 に退き、次に閑城に思ひ、遂に龍窟に

たといふ。女子と小兒は眞に難しと
か、少々醜い惡口ではあるが、さう
したものと見ゆる。其當否は判て
いて門閥は惡意を以て力とす。此
門とは世傳のこころで、此門の
坊さん仲間で金持悪奴はこはいは
れぬ。チロイ／＼面白くない。諸も
にするが、兎に角も此門は惡意を力
とする。國王は兵城を以て力とする
之は申すまでもない。羅漢は精進を
以て力とする。菩薩は慈悲心を以て
力とする。此慈悲心こそ力の究極で
あつて勇猛精進の心も此の慈悲の力
に依つて現はれる。吾人が經の立派
から、心の力といふも精進力を牽
成するといふても、要するに此大慈
悲心を具はして、無量多き血まみれ
の體を、慈悲の力に依つて、土土の
に、海軍の北條に引揚ぐるを
得て同年五月まで據拠し驅逐せり。
明人の皇朝記略には此戰を詳み
て記さず、藏人の慈覺には他所事
の如く之を試するも其月日を記さず
明人の正たる明史の如事も極めて略
なり。唯南陽日本外史は此戰を
薩摩一人の功とする、其實際に合はず。
廣成の本營を總指揮官たる岩田秀
家の下に兼監督川大谷、長束、諸將
ありて我に充分準備ありたるは論
を俟たざるなり。余は全く水戸藩出
陣長緒綱、慈覺公偉績に敬服したり
。高陽里は京城を距ること四里、古
への室前の建物あり。門前に碧繪飾
の三文字を懸つ。先年碧繪より此
を移したりと云ふも信じ難し。本来

國土を建設するといふに外ならぬのである。力を養成すると言つても、坊さん風にせなければならぬといふのは決してない。人々その立場ごとに順じて、その適用を現はして行かねばならぬのである。

碧蹄の戰

(文廟後三百廿五年の當日)
素豪散人 倫

余は先年高陽郡碧蹄里に遊び、小早川隆景諸將の墓開せし古戰場を躬ひ又従來日清韓の史蹟に散見する稗傳を精駁し之を朝鮮雜語に寄稿せしことあり。余の拙著ある新體詩も當時の資藉にして、戰史の源一に於けるに足らずと雖も、此戰蹟は今大正六年を距ること三百廿五年前、即ち

麗州中征伐を獲たることは月沙集に見ゆ當時の遺物なりしならん。陽曆二月の末三月の初は春涼うして微雲は景城の里律八里の道程に過ぎぬは京畿の子弟悉して此戰蹟を實地に探究せしむるは國民教育の資料たるや大なり。世の亦想浪人の瞻瞻私怨を記念とし浪花節流の臨史教料を使用するものゝ如きは彼人の子々賊々の甚しきものなり、余の唱明せんとする新體戰事詩は左の如し

三百年の天の昔し
箕子遺民の
西へ西へ進みしが
明の探險隊ばかり
手開き者あるれば
北地の騎へ集り
まがりの行も

我十萬の大衆は
敵は皆用兵者
手開き者あるれば
北地の騎へ集り
まがりの行も

碧蹄の戦
 戦ひ

農耕中往々鎌を獲たることは月沙集に見ゆ當時の遺物なりしならん。陽曆二月の末三月の初は春蒔うして穀粟を覺ゆるも往復千里の遠程に過ぎされば京城の子孫をして此職蹟を實地に探究せしむるは國民教育の資料たるや大なり。世の赤穂浪人の脂髯私邸を記念とし浪花節流の歴史教科を使用するものゝ如きは彼人の子を賊ふの甚じきものなり、余の高唱せんとする新體歌事詩は左の如し

我十萬の大衆は
事件の夢をまてく
西へと東へしが
明後此舟が客になり
百年後の春をあらり
其間に明の役者は
北地の國兵歸り来り
また吾等の名も
三才の草花の如し

○夢蔭可憐）西田 自陰
評曰 情味闊達
玉葉芙蓉接大膏。羽毛高舞入雲中。賤一枕微夢夢。聖代餘榮笑俗翁。
評曰 奇想天外

日 報 歌 壇

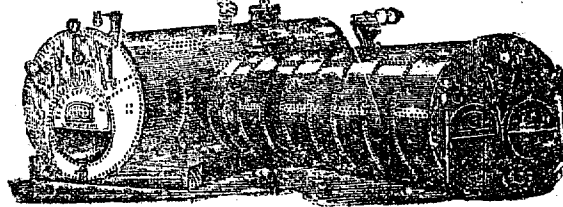
大山 名無草
心いよ静かにあれば地に落つる雪片を散へて物思ふわれ
京娘 志摩 秋木
すぐる鳥つと啼きすぎぬ灰色に粉雪降る野を眺めておれば
京娘 都子 緒
艸草咲む醒くき箭の染みでゆくわが若さ日に盡ざかりつ
城
春告われの持ちたる丹の頬をそののみ持てる少女なり君は
宮娘 若木古希子
あなかなし母にわかれし夜の如く

日 報 詩 壇

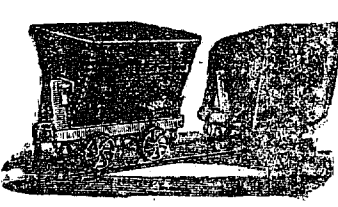
日 報 詩 壇
 ○新年健咏 藤倉 照蔭
 臘眼難勾未成。瓶梅笑處又呼醒。勿
 耐新年頭紫。又爲詩人費品評。
 評曰 歲首實况
 ○探梅 阪上 怡菴
 程有幾夕陽天。尋得梅花雪寺前。山
 忽來描女字。脂香浮動嫩燈邊。
 評曰 奇巧可驚
 ○同 田端 柔州
 臘眼張張香未。不問先知有早有。行
 蹤隨處見春歸。如松竹葉一庭新。
 名士之句。最是佳。然以志士。乃
 不武士之句。最是不佳。蓋其意。乃
 欲以壯氣。掩其風流。故其詞。雖
 有豪氣。而無雅趣。此等詩。固非
 詩壇所宜有也。

日
報
欣
壘

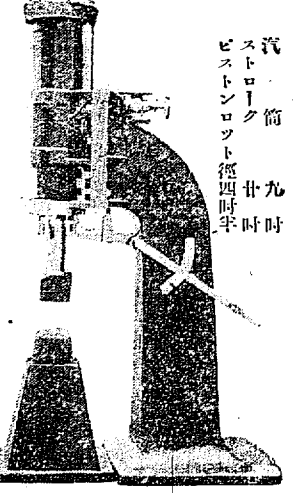
100



△英國ビツク會社製汽鑪
 ランカレヤ型直徑七呎長卅呎 一個
 水壓百五十封度 所在 新義州稅關濱
 △獨逸ボルマー會社製
 高壓チユブボイラー 徑四呎三吋
 長十二呎 徑二吋 在チユブ六十三本 八
 水壓二百封度 所在 地 京城當工場



△スチム、



☐ 本店は物價低廉の際輸入在庫品豊富に付鐵工一般



き 近 に 全 完 々 稍 る け 於 に 鮮 朝

五南
丁大
目門
通

中
根
販
賣
部

電話四一〇四番一〇五番

NAKANE
FOUNDRY
AND
IRONWORKS
TEL 104-105-256

機 啣 鑄 炭
械 箇 山 機
製 各 機 汽
作 種 統 鐵

商 會 販 入 輸 運 貨 物 工 機 機

岡京
崎 町 城

中
根
工
場

電話二五六番

小林蹴月作 武内桂舟畫

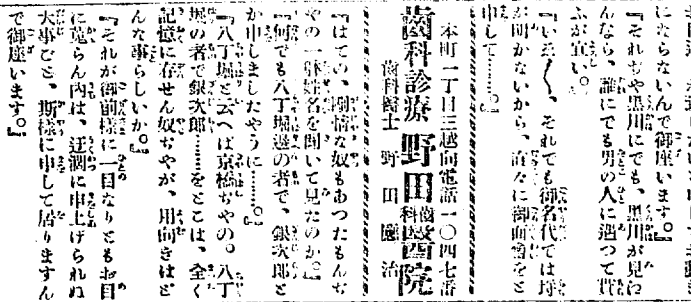
「なに、桑原君が歸つた？ 何處へ歸つて居つたからごて、親君のみを産して行くとは亂暴さやね。お祐さんお前は僕で歸るがよろし。雪虎少々降つたらか云つて、雪町までは一走りやからぬ。」

「ほんとに、その通り。淋病なんぞ御坐いますからね。御前、お察し遣はして下さい。」

「成程、桑原君に、何合はん妙な仕打云ふもんぢやね。どうせ、一緒に歸れん位なら、さてもの次手ぢや、お祐さん、もう少し酌を爲ながら罷枕手になつて貰ひますかの。」

「いや、考へて見やう、乃公も獨身者ぢやからの、主ある花を屋敷に引止めたあつては、後々までも口が利かれん。お前さてもその如くぢや、先刻も言ふ通り、公然桑原君の緣故でも絶つた上の事なら、又次の時の思案方法もあらうと云ふもんぢやが、今當り何の道障つて貰つた方が、双方の爲云ふもんぢやの。」

「でも御前、此の大害に及、僕で居るなんて、何だか恐しいやうな氣が致しますもの。實際のけにさへ、しい事がなかつたら、良心に堪つた。」



「はい、御前様あの只今、ついで見馴れないお城人置のお方が、お安殿にお見ねになりまして、御前様に一寸内々でお目通りが致したいと申されるんで御座います。」

ほんに名物
木村屋パンと
うまいドロップありがどう

「何ぢや、薩人置の男が……」深更と云ひ、此の雪の舞はない、用がある者の来るべき筈はない、用があるなら客来さやから明日来いこ申せ。」

「はい、左様に申しましたんで御座います、五分間で近いから是非」

(電話明治四〇)

「ならないんで御座います。」
「それや黒川にでも、黒川が見
ななり、誰にでも男の人に遇つて貰
ふが宜い。」
「いゝ、それでも御者代ては母
が聞かないから、諸々に御前情をこ
申し……」
本町一丁目三越向電話一〇四七番
齒科診療 野田 徳蔵 西院
齒科醫士 野田 徳治

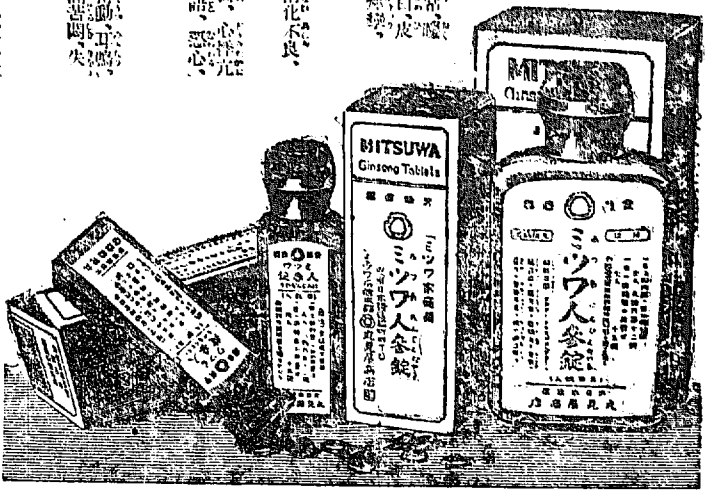
佛蘭西の負債者と獨逸の負債者も中
 立國たる瑞西へ送られるが停車場に
 は佛國から獨逸負債者を送つて來た
 汽車と獨逸から佛國負債者を送つて
 來た汽車と同時に著く、何れも負債
 した片輪ばかりで雙方が一緒に落合
 うと『やあ今日は我々の戰ひはもう
 済んだのだからお互に友達になりま
 せう』と云つて今迄の敵は忽ち仲の
 宜い友達になつてゐる、而して彼等
 が歸る時は互にハンカチを振つたが
 左、左隣なら御機嫌どうと言つて
 分れる、實際其現状を見るに涙がこ
 ぼれると瑞西の一士官は云つて居た

朝鮮彙報（二月號）道長官及び司法

[illegible][illegible][illegible]

効主
神經衰弱、ヒステリー、ヒポコンデリー
頭痛、偏頭痛、眩暈、腦貧血、腦充血
腎臟炎、貧血、老衰、營養不良、精力減退

本神は、**強健**、**開腹**、**利尿**、**健胃**、**強壯**等の諸作用を具ふるものにして、其醫治的効用の主要を舉ぐれば、**神經衰弱**、**肝膽ヒステリシ**、**ヒポコンダリヤ症**等の疾患に發現する諸症候、即ち**精神興奮**、**過調**、**異常意識投射**、**遺精**、**淋毒不能思考力**、**判斷力記憶力減退**、**睡眠不安**、**消化不良**、**心悸亢進**、**手足厥冷**、**遺精痛**等に対しての効用を呈し、**頭痛**、**偏頭痛**、**眩暈**、**肺貧血**、**腦充血**の如き神経系疾患を治し得べく、之を併進して慢性輕度胃腸病、**腸胃病**、**肺貧血**、**腦充血**、**腦充血**の如き神経系不良を回復して、**木口入り皮膚病**として強壯なる血色に變ぜしめ、體力を推進し、又精力を用すれば、**老年の體面**を去る等の卓効を奏す。

[illegible]

大正六年
二月十六日
朝鮮總督府官報

鮮
鮮
受驗必携書

●あだむすみす。帝國主義

口語 法文部省
微分積分早わかり 秋山雪
模範解説 讀方獨習 荒井
現代英詩鈔 山宮
友誼と理想 婦人の精髓 井
より親なる
默仙禪 話日笠 默
無我の生 舌頭非石

小説かつばの尻丘の

富の道しるべ

金泉職官自効

[illegible]

三河丸 二月十九日
相模丸 二月十九日
高砂丸 二月十八日

尼崎汽船

山崎 釜山 下關
 有木 釜山 下關
 秀吉 釜山 下關
 神代 釜山 下關

電話 五十九號

共同汽船

大連行 關東船務

電話 五十九號

野一

仁川代運店 野一
 客貨電話 四四七番
 元山代理店 山口
 東山代理店 山口

安	神戶大影石	天智丸	三月一日後五時
卓		丸	三月四日
二			
月			
日			
後五時			

○大沙直航
△チヨイサン
×福州丸
○群山、釜山、越道行
×安東丸
×橋濃川丸
○水河、釜山、屏尻、楚の浦、長崎
二月廿二日午後二時

○釜山、橫濱行
○東南丸 二月一日正午

○木浦 大智丸 二月 日正十二時
 ○山 煖丸 二月 日正十二時
 ○上流、基羅、打龜行(大通出帆)
 ○初七、基羅、打龜行(大通出帆)
 ○安 平丸 三月 一日後二時
 ○宮 平丸 三月 一日後二時
 ○印 城津西船 三月 一日後二時
 ○印 城津西船 三月 一日後二時
 ○印 城津西船 三月 一日後二時

切符發賣所 大阪商船會社 仁川
電話 二番二二〇番五
京成切符發賣所 內國通運會社

門司	神戶	大阪	二日午後五時
○立神丸	○和歌浦丸	三月十九日	午後五時
元山	津濱	浦鹽行	
○和歌浦丸	二月十八日	午後十時	
○立神丸	西洲	新浦	城津
元山	三澤	三月六日	午後六時
門司	神戶	大阪	三月六日
○立神丸	○和歌浦丸	三月十九日	午後五時
元山	津濱	浦鹽行	
○和歌浦丸	二月十八日	午後十時	
○立神丸	西洲	新浦	城津
元山	三澤	三月六日	午後六時
門司	神戶	大阪	三月六日

朝鮮郵船

昌隆	成發	廣金	京全
平城	鏡海	鏡海	鏡海
九九	九九	九九	九九
二月廿二日	三月十八日	二月廿三日	二月廿五日
元	壹	壹	壹

江 每 日 浦 釜
長生補方魚津存記

○全陽九	○錦江九	○麗州九	○晉州九	○江都六	○公川大	○夢野大	○南陽大	○興夫大	○忠清大	○統元大	○三浦大	○三浦大
每日午割	二力	二月廿一日	二月廿一日	二月十九日	二月一日	二月廿二日	二月廿二日	二月廿三日	三月七日	三月七日	三月七日	三月七日
仁	仁	仁	仁	仁	木	木	木	木	元	元	元	元